



The Japanese Red Cross Society of Nursing Science

日本赤十字看護学会



NEWS LETTER

日本赤十字看護学会ニュースレター 第5号 2007年12月発行

Vol.5, 2007.

—1



「眞の赤十字人は、やるべき仕事に
直面した時、目立たないように自分の行為を
隠そうとします。」

解説 赤十字の基本原則 人道機関の理念と行動規範
(ジャン・ピクト著／井上忠男訳、p98、東信堂)より

◀ 地震救援活動を行う日本赤十字社の医療要員
(2005年 パキスタン、チナリ)

赤十字国際委員会[®]

理事長挨拶

日本赤十字看護学会 理事長 新道 幸恵

師走の候、会員の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。初代理事長の樋口康子先生から理事長をお引き受けして最初の総会を6月16日に日本赤十字豊田看護大学において開催致しました。その総会では、新理事会の1年間の成果としての活動報告と次年度に向けた事業計画を報告し、承認を得ました。また、樋口先生が3月末日をもって、日本赤十字看護大学の学長を退任されましたことを機会に、名譽会員に理事会からご推薦し、総会で認められました。この決議は、本学会の創立者としての先生のご貢献に感謝し、今後共に、本学会を見守ってほしいとの会員の皆様の願いによるものと思っています。本学会には創立以来、ご貢献のあった方々で第一線を退かれている方がまだ他にもおられますので、今後理事会で規約などを具体化することも含めて検討していくことにしております。

本理事会は、前理事会から事業を継承し、充実発展させることに努力してきました。新たに発足しました「臨床看護実践開発事業委員会」は、日本赤十字の看護の特性とは何かを問いかけながら、先輩の方々から受け継いで各臨床で実践しておられる看護を発掘することを目標にした活動に取り組んでいます。学会誌の編集発行も編集委員会が中心になって、年1回を維持しております。この発行には、会員の皆様の積極的な関与を期待しているところです。研究活動委員会は、会員の皆様の研究活動の推進を支援することを目標に、年2~3件の研究助成金の支給に関する事業と年1回の学会開催時に「研究」に関する研修会の開催とを継承しております。今年度から3年間は「質的研究」を取り上げる予定にしています。高度情報化社会の今日におきましては、広報活動は学会の発展に不可欠です。そこで、ホームページのリニューアルと機能の拡大を広報活動委員会が中心になって図ってきました。今後共に、会員の皆様に活用して頂けるように魅力的なものにして行くべく、努力していく予定です。

今年から国際活動委員会を発足させました。この委員会では、日本赤十字活動は本来国際的な活動が主であり国際的なネットワークが形成されていること、日本赤十字看護には国際活動の豊かな実績があること等を考慮して、グローバリゼーションが加速化している今日、本学会としての国際活動のあり方を検討していくことから始めたいと考えております。

今回の総会で本学会の10周年に当たります第10回の学術集会長（平成21年度）として守田美奈子副理事長（日本赤十字看護大学教授）が承認されました。

次年度の学術集会が6月14、15日に奥野茂代会長（京都橘大学教授）によって開催されます京都で会員の皆様方にお目にかかりますことを楽しみにしております。

第41回フローレンス・ナイチンゲール記章 日本から看護師3名が受章

2年に1度、顕著な功績のあった看護師に授与される世界最高の記章であるフローレンス・ナイチンゲール記章の受章者が、5月11日、赤十字国際委員会ナイチンゲール記章選考委員会（スイス・ジュネーブ）から発表されました。今回の日本の受章者は、志田蝶（しだちょう）さん、松木光子（まつきみつこ）さん、川嶋みどり（かわしまみどり）さんの3名です。今回の受章により、日本の受章者総数は計100名となりました。

寄稿文

「伝えたい 赤十字の看護」

愛知医科大学看護学部 多 喜 田 恵 子

赤十字を離れて12年になる。いま改めて、私にとって赤十字の看護とは何であったかと考えたい。

看護学生の頃は、赤十字のナースは、人道・博愛の精神をもって世に貢献することが究極の目標と学んでいたように思う。赤十字という組織への服従や奉仕、献身は、赤十字のナースの誇りであり、あの頃の看護学生に共有したサブカルチャーであった。看護教育の中で培われてきた価値観であったとはいえ、赤十字の伝統を守らねばという使命感が根底にあったと思う。しかし、医療技術の高度化、複雑化や治療・看護が機能分化する臨床現場の荒波にもまれていく中で、旧来の価値観は変化し、次第に何に貢献しているのか不明確になっていったように感じる。

現代医療の特徴は、治療優先の市場原理であるという。臨床現場が効率性や合理性などが重視され、患者全体を理解し、ケアするという志向が低下しつつあるように感じる。入院日数の短縮化により、重症患者においても短期治療が余儀なくされている。その結果、患者や家族と医療スタッフとの関係も希薄になってきているように思う。患者からの苦情や訴えが多くなってきた背景には、現代医療に対する不満の高まりが見え隠れする。

赤十字の看護で最も重要なことは、人権を尊重することである。医療現場が変化しても、そこに病む人がいることには変わりない。病んで苦しんでいる時こそ、大切に扱ってほしいと願うのは当然のことである。時には傍若無人の患者・家族に疲弊することもあるが、それでも専門職者として対応せねばならない。

人権擁護の敵は、利己心、無関心、認識不足、想像力の欠如であるという。医療経済が激化するなか、今一度、誰のための医療なのか、何のための看護なのかと考える必要がある。高度な医療技術に対応できる専門的知識や技能は重要であるが、いかなる場合でも守るべきものは、人権である。これから医療・看護は、患者や家族の人権擁護に加えて、臨床現場で働く看護師の人権を尊重することも大切である。

赤十字の看護は、「人道：humanity」そのものである。国籍、民族、宗教、社会的地位のいかんと問わず、手を差し伸べることである。従来は、ナースの振る舞いや心構えが重要であったが、今後はナースであるという強い信念と柔らかい人間のあり方を模索しながら、伝えていきたい。

赤十字活動の意味するもの

地方独立行政法人 宮城県立こども病院
副看護部長 伊藤てる子

私は石巻赤十字看護専門学校を卒業後、仙台赤十字病院に23年間勤務し、在職中、赤十字の国際救援活動に4回参加させていただいた。その後、2001年から宮城県立こども病院設立準備作業に携わり、現在に至っている。

4回の国際救援活動のなかでも、赤十字国際委員会からの要請で派遣された「アフガン難民救援」(1989年)は、私自身のなかで赤十字の活動やその意味を考える転機となった。1989年当時、アフガニスタンからソ連軍が撤退し、ムジャヒーディンと呼ばれるアフガニスタンの反政府勢力とカブル政府が戦っていた。赤十字国際委員会では、この戦争負傷者のための病院をアフガニスタンの首都カブルと隣国パキスタンのペシャワールとクエッタに設立していた。私は日本赤十字社から初めての医療要員として、ペシャワールに半年間派遣された。風俗習慣の異なる地で、多国籍の人たちと共に働く戦争負傷者の救護は、経験のない私にとってひとつの試練であったが、なによりも自分の中で整理がつかなかったのは、どんなに一生懸命救護しても、元気になればこの人たち再び戦いの中にもどっていくという現実であった。紛争が激しくなければ運び込まれる戦傷者も多数となる。幼いこども達までも犠牲になる戦争の酷さのなかで、一人の人間としてできることのわずかさに、無力感を感じていた。

日本にもどってから、この救護活動の意味を何度も何度も考えていた。そして、赤十字の発祥に思いが至った。1859年、アンソニー・デュナンがイタリア統一戦争で路傍にうち捨てられていた負傷者を見過ごすことができずその救護活動にあたり、そこから端を発し、国際赤十字という機構が創られていった。赤十字の基本的原則である「人道」がなぜ「苦痛と死とに対して闘う」「人間がすべての場合に於いて、人間らしく扱われることを要求する」とされているのか、その意味をこの救護活動を通して学んだ気がする。

私は今、赤十字を離れているが、看護者としての自分の根本は赤十字での教育、経験の中から培われてきたものを感じている。看護活動の場は、国内、国外を問わず広範に亘る。複雑、激動化する社会のなかで、人間の尊厳を守り、実践としての「人道」を基本とする『赤十字の看護』の役割は、さらに大きなものになっていくのではないかと考える。



トピック

日本看護系学会協議会について

守田 美奈子

日本赤十字看護学会は、日本看護系学会協議会（以下協議会と略す）の会員として毎年会費を納入し、その活動に参画しております。そこで、この場をお借りして、会員の皆様に協議会の活動を紹介させていただきます。

まず協議会の活動と関連の深い日本学術会議について少し説明させていただきます。日本には、内閣総理大臣が所轄する日本学術会議があります。日本の学術の進歩に寄与することを目的に、内閣総理大臣が指名した学者、研究者により運営される会議です。この会議で日本の科学や学問の発展の方向性が話しあわれ、具体的な政策提言や研究費配分などの検討がなされます。つまり、ここは日本の諸学問の総本山であり、逆に学術会議に参加できることは名実ともに独立した専門的な学問分野として認められることになるのです。残念ながら看護学は長きにわたり、この学術会議に参加できませんでした。そのため看護界の諸先輩方は、看護学が日本の学術団体の中で認められるよう、看護学の組織化をはかる努力を積み重ねてこられました。この一環として、日本学術会議看護学研究連絡委員会が組織され、それを支援する目的でつくられたのが日本看護系学会協議会です。本学会の前理事長である樋口康子先生が呼びかけ、2001年に看護系学会協議会が発足しました。

その後、日本学術会議は平成17年に大幅な組織改革を行い、そのため看護学研究連絡委員会の存在意義がなくなり、この組織は同年に解散しました。それに伴い、主な活動目的であった看護学研究連絡委員会活動の支援の必要性がなくなりました。そのため、協議会の存在意義を巡って議論がなされました。また、平成17年に役員改選もあり、協議会は新たな使命とともに、現在活動が続いている。現在の会長は大田喜久子氏です。この改革の途上、看護界から南裕子先生が学術会議の会員として任命され、これまでの看護界の悲願がはじめて果たされました。

協議会の新たな活動の目的は、「看護学会相互の交流と連携をはかり看護学研究の成果が社会に還元する学会活動を支援すること、そして「人々の健康と生活の質の向上のため、国・社会に向かって必要な提言を行い、国内外の学術組織との相互協力を推進していく」ことです。活動内容は年1回、総会を開催し、ニュースレターを発行することや学術会議との連携をはかること、公開シンポジウムを開催することなどが挙げられています。

高齢化や少子化など社会の変化に伴い看護への期待が寄せられています。いま、看護学は、その存在と力を社会に發揮するよい機会を得ています。協議会の目的にあるように、学術組織が相互に協力しあい、人びとの生活の質の向上に向けて社会にアピールしていくなければなりません。日本赤十字看護学会も、社会に向けて赤十字の看護の知や技をどのように示していくか、大きな課題を抱えております。今後も日本看護系学会協議会の会員として、日本の学術会議や他学会とも連携を取りながら、本学会らしい活動を進めていくよう努力していきたいと思います。今後とも、より一層会員の皆様のご協力とご理解を頂きたく、お願い申し上げます。

看護系学会等社会保険連合(看保連)って何?

川嶋みどり

「毎日こんなに忙しいのに、働いたことが経済的にきちんと評価されないと情けないね」「医療行為には点数がつくけど、看護にはどうしてつかないの？」

こうした疑問や思いを、日々の看護を行う中で一度ならず持つことがあるでしょう。看護系学会等社会保険連合(看保連)は、『診療報酬体系の中での看護評価の、充実・適正化を促進することを目的とし』『学術的根拠に基づいて社会保険医療・看護の在り方を提言する』組織です。2005年7月に発足し、40の看護系学会・団体により運営されています。二つの委員会があり、日本赤十字看護学会(代表川嶋)は、「診療報酬及び診療報酬体系のあり方に関する検討委員会」に所属して活動しています。もう1つの委員会は、看護技術検討委員会です。本学会の竹内幸枝理事は看保連の監事として活躍されています。

看護の社会的価値を高めるためにも、行った看護行為が正当に評価されることが必要ですが、現行の診療報酬体系での看護に関する評価は、看護要員数に応じた丸めの報酬为主であり、看護技術は全く評価されていないのが現状です。医療が高度化すればするほど、また、チーム医療が進めばそれなりに、看護専門職に求められる内容も広がり、根拠に基づいた確かな技術の提供が必要となります。そうした中で、正当な看護の評価は、医療経営上にも重要な影響をもたらしますし、意欲的な看護実践の動機づけにもなるはずです。看保連の井部代表は、「看護評価の向上に向けて、看護職全体が研究、知識を横断的に共有し、学術的なエビデンスを深め、積極的に中央社会保険医療協議会(中医協)など政策の場に看護の意見を反映していく必要があります」と、この活動の今日的意義を述べています。

これを受けて、看保連では、平成19年7月に厚生労働省保険局に、「平成20年度診療報酬改定に関する要望書」を提出しました。内容は「1.退院調整と地域連携の評価、2.在宅療養における訪問看護の評価、3.在宅における看取りに関する評価、4.訪問看護における衛生材料の取り扱い、5.7対1入院基本料に関する要件、6.急性期小児病棟の看護配置基準5対1の新設」の6項目です。この要望書が、今後どのように実現化されるのか、次回の診療報酬改定が注目されます。

本学会でも、赤十字の看護実践の成果を掘り起こし、これを研究的に蓄積して実践の質の向上に寄与しようする活動が始まりましたが、これは、看護の経済的評価を得るためにエビデンスのにもつながります。看保連の活動は、こうした各現場の実践を根拠にし、現場からの現行診療報酬の矛盾や問題点を反映させた論議を重視しています。是非、会員のみなさまの関心を、この看保連の活動に向けていただきたいと願います。

国際活動委員会の発足

委員長 原 玲子

本学会に、新しく、「国際活動委員会」が立ち上げされました。

近年のグローバリゼーションの流れの中で、国際的視野を持った活動があらゆる分野で求められ、看護学においてもその必要性は年々高まっています。看護の学術学会は30を超えるまでになり、それらの学会においても国際的な活動が行われてきています。

日本赤十字社は、その歴史と共に世界性を有し、看護活動も国際的に行われています。本学会においても、国際的な活動を実施していくことは、日本赤十字学術学会としてのユニーク性をより高めることになるであろうとの考えから本委員会が立ち上げられました。

本委員会の目的は、現在までに積極的に行われてきた赤十字看護の国際的な活動について共有し学術的な発展を支援すること、他国の赤十字看護師教育機関等と連携して国際的活動に関する課題を共有すること、国内における他の学術学会とのつながりを持ち国際活動を行うこと等を通して、本学会の発展をもたらすことになります。

今年度は、委員会活動のスタートとして、海外の赤十字機関の活動についての情報収集や海外での活動実績のある方の体験談等を看護職や看護学生へ伝えるための体制作りに着手していきたいと考えております。

会員の皆様には、ぜひ、国際看護活動に関する情報や学会へのご意見・ご要望を頂戴できたらと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

第8回日本赤十字看護学会学術集会を開催して

学術集会長 小西美智子（日本赤十字豊田看護大学）

2007年6月16日(土)と17日(日)に本学を会場に、第8回日本赤十字看護学会学術集会を開催いたしました。梅雨の時期であるため傘袋を用意したりと雨対策も配慮したのですが、開催日2日間のみ快晴でその前後は雨降りという、天候も味方に引き入れて、全国から日本赤十字看護学会会員、日本赤十字医療機関、日本赤十字系看護大学、さらに愛知県内の保健医療福祉機関の看護関係者等300名近い参加者を得る事が出来ました。

平成16年4月に本学は開講し、その年に日本赤十字看護学会理事長から、第8回学術集会を開催する要請を受けました。教員も日本赤十字看護学会に入会している者が少ないとから、会員になること、そして学術集会に参加する事が最初の準備作業でした。

近年我が国は生活習慣病の増加や台風・集中豪雨さらに地震による被害が多発しています。これらの対応には、保健医療職による専門的な治療・ケアに加えて、人々が日常生活上で健康管理と予防的対応ができるように支援する事が必要です。そこで学術集会のテーマ及び会長講演は「看護活動と地域社会との協働」とし、それぞれの地域にある保健・医療・福祉機関及び専門職が、地域の人々と協働して、健康づくり、疾病予防、QOLを保証した療養生活、自然災害に対する防災について考えたいと思い提示しました。シンポ

ジウムは「いま何故退院支援なのかー退院後の安心を提供する医療連携のあり方」とし、地域社会にある保健医療福祉機関・専門職、さらに住民との協働のあり方を模索しました。テーマセッションは「新人看護職員にとって魅力的な職場とは」「災害時の地域看護活動の構築」「赤十字病院における施設を越えた専門看護師の効果的な活用」「赤十字に関する教育」「地域医療連携ネットワークの構築」「医療と情報」の6課題について、口演51演題、示説24演題の内容は、母子の健康と看護、急性期看護、慢性期看護、看護援助の方法、家族看護、精神看護、在宅看護、看護管理、看護教育、赤十字と活動、国際・災害看護等で、日々の医療機関での看護活動から看護教育まで含めた広範囲な活動成果が研究報告されました。これらは、日本赤十字看護学会に相応しい内容であり、日本赤十字活動及び看護実践・教育活動が地域社会とともに発展するきっかけづくりになったと確信しています。

参加者のアンケート回答では、大学へのアクセスについては苦言もありましたが、内容的には満足という者が多く、企画委員及び実行委員が大学での教育活動、医療機関での看護活動の合間に手弁当で日夜企画運営に尽力していただきました成果と深謝しています。

「第9回日本赤十字看護学会学術集会」開催のご案内

メインテーマ

認知症の人と家族のくらしを支える看護を考える

第9回日本赤十字看護学会学術集会では、「認知症の人と家族のくらしを支える看護を考える」をメインテーマに開催いたします。

わが国においては、引き続き人口の急速な高齢化が進み、2015年に「戦後のベビーブーム世代」が65歳以上になりますと推測されています。このような高齢社会の情勢を踏まえて高齢者介護研究会報告書(2003)には、これから高齢社会において、「高齢者が尊厳をもって暮らすこと」を確保することが最も重要であり、「高齢者の尊厳を支えるケア」の実現を基本に据えた自助・共助・公助のあらゆるシステムをこれまで以上に適切に組み合わせていくことが国民的な課題である、と報告されています。特に認知症高齢者に関しては、現在要介護高齢者のほぼ半数に認知症の影響があり、また施設入所者の8割が認知症の影響が認められることから、認知症高齢者への施策、ケア対応が強調されています。

しかし、現状は、ケアシステムやケア提供者の数や質に問題が多く、認知症高齢者に望ましいサービス提供が行われていなかつたり、相変わらず介護家族の方々の負担による惨状が報告されています。

そこで本学術集会では、認知症高齢者はどのようなケア環境のもとで暮らしておられるのか、認知症になってもその人らしい生活を自分の意思で送ることができないのか、認知症高齢者と介護する家族の方々の暮らしを支える看護に求められるものはなにか、などについてあらためて考えてみたいと思います。認知症高齢者へのケアの推進は、すべての高齢者や各世代を対象にした看護を通じるものであり、今後の看護ケアを展開する指針を探求する

2008年6月14日(土)・15日(日)

会場：京都橘大学 京都市山科区大宅山田町34

ことにつながると信じています。

赤十字の基礎看護教育、卒後教育、継続教育、および看護実践に携わる方々をはじめ、看護や介護に携わる方々にとって役立つ見聞の交流の場とし、社会に貢献できる看護について討議しあい、ひいては看護の発展の寄与につながることをめざしたいと、願っています。

演題・抄録の申し込み期間は、2007年11月26日(月)～2008年1月31日(木)です。また学術集会への事前登録締切日は2008年5月23日(金)です。会員の皆様には「開催のご案内」を9月にお送りしましたが、ご不明な点がございましたら学術集会事務局(E-mail:jrc-9@tachibana-u.ac.jp)にお問い合わせください。また第9回日本赤十字看護学会学術集会ホームページ(<http://plaza.umin.ac.jp/jrcsns/>)及び、京都橘大学ホームページ(<http://www.tachibana-u.ac.jp>)からダウンロードが出来ます。

学術集会では、京都橘大学学長田端泰子先生による特別講演「乳母の力」を予定しています。中世時代を影で支えてきた乳母の役割と権勢をとおして女性の力強さを学び、分かちあいたいと思います。また皆様には、メインテーマにこだわらず自由に、日ごろの活動を研究や実践報告、交流セッションなどの方法にまとめひご発表ください。そして緑が深みをましアジサイなどの花々の美しい京都へ、多くの方々にご参加いただきますよう、ご案内申し上げます。

第9回日本赤十字看護学会

学術集会会長 奥野茂代(京都橘大学)

平成20年度研究助成のお知らせ

本学会では、学会員に研究費用の一部を助成しています。
【応募資格】研究代表者が2年以上の会員歴があること、共同研究者が申請時に会員であること。

【助成金】研究1題について30万円を限度として交付
【応募期間】平成20年2月1日から2月28日まで
詳しくは本学会のホームページをご覧ください。

看護研究セミナー「質的研究の計画書を書く」のお知らせ

【日時】平成20年6月15日 10時10分から12時20分まで
【場所】第9回日本赤十字看護学会学術集会(京都橘大学)
【講師】東京医療保健大学 北素子先生
【内容】質的研究での研究計画書の書き方、面接法、フォーカス・グループ・インタビュー、参加観察などの質的研究のデータ収集方法、データ収集にともなう倫理的課題とその対処。皆様のご参加をお待ちしています。

看保連ホームページのご紹介

看保連のホームページ内には会員専用のページがあり、会議録などの情報が記載されます。専用ページへのアクセスの際に下記のID、パスワードをご使用ください。なお、ID、パスワードの取り扱いには十分ご留意ください。

日本看護科学学会会員用看保連ホームページ
ID : kagaku
パスワード : G9vwjjhL



NEWS LETTER The Japanese Red Cross Society of Nursing Science 日本赤十字看護学会ニュースレター 第5号 2007年12月発行

Vol.5, 2007.

●発行 日本赤十字看護学会 広報委員会

愛知県豊田市白山町七曲12番33 日本赤十字豊田看護大学内
FAX 0565-37-8558

●学会ニュースレターは学会ホームページからダウンロードできます。

<http://jrcsns.umin.ne.jp>

●学会ニュースレターに関する皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。

sugiura@rctoyota.ac.jp
skobayashi@rctoyota.ac.jp までお願いします。

●編集後記

皆様のご協力を賜り、ニュースレターも第5号を発刊することができました。「伝えたい看護の技」も引き続き募集しています。皆様のご参加をお待ちしています。現在、本学会員の皆様に、UMIN(大学病院医療情報ネットワーク)を通じて、ID・パスワードを配布する準備をしています。このID・パスワードによって、ホームページ上で掲示板、電子学会誌を活用していただけることになります。年1回発行のニュースレターではお伝えできなかった多くの話題が満載です。どうぞ期待ください。